

文学に描かれた戦争②

喪失の哀しみ—*Fugitive Pieces*

榎 本 眞理子

僕は自分が死者だと思いなしていた。——死んでから見る夢のなかで、自分が生者だと想像している死者だ、と。(エリ・ヴィーゼル『昼』より)

1. はじめに

現代において人間を、「私」をどのように捉えるべきか。河合隼雄はジョン・ヒックの「宗教多元主義」やデイヴィッド・ミラーの『甦る神々 新しい多神論』、同書所収のアンリ・コルバンの手紙にふれた上で、「私」について考えている。そして成長神話という「一方向的思考に縛られてしまっていると、現代はまったくの閉塞状況ということになる」が、「ネットワーク・アイデンティティ」という考え方をすると事態の打破に繋がるのではないかと提言している。

「ネットワーク」と言っても私が家族や友人に支えられてという話ではなく、自己の心の中にある「ネットワーク」のことである。「自分の心の中にある自己は、すなわちすべての人である」というユングの考え方はそれなりに意味があるが自己を「中心」におこうとするところに問題がある。河合は「中心によって統合されていないところに特徴が」あり、なおかつ「そのような状態のなかで、やはり『同一性』を確保する努力をすることによってその人の個性が磨かれる」のが「ネットワーク・アイデンティティ」であるという。それが成人男子であるとすれば「いつも固定した成人男子としての応答が返ってくるのではなく、ときに子どものようであったり、老人のようであったり」するもので、そこに豊かさがあるという。(217-223) 「中心

によって統合されていないところに特徴」があり、なおかつ一定の同一性を保つとは、まさしく多田富雄が『免疫の意味論』で提唱したスーパーシステムそのものである。それが大変大きな意味を持つことはいまでは常識の部類にはいるだろう。

上に引用した資料からも、現代において「自己」を捉えるに際して、かつてとは異なるアプローチが必要であることが明らかであろう。多元論的なものの見方、また一見ささいなことへの注目、このような観点からも大変意義深いことなのである。

ロナルド・ライトの『文明の暴走』によれば過去一万年間、世界の気候は「並はずれて安定していた」(66) のであり、それは「農業と文明が存続していた期間とぴったりと重なる」という。わけてもここ数千年の気候は「望みうる最高」だった。その中で文明がはぐくまれた長い静穏状態を「文明そのものが狂わせつつある」のが現在である。世界の穀物生産が減少する一方で世界の人口は増え続けている。温暖化だけでも悪条件なのであるが最悪なのは「地球の気候バランスが突然崩れ、昔ながらの発熱と冷え込みの繰り返しに戻る」ことで、そうなれば至る所で凶作が発生し、「文明という一大実験は破滅的な結末を迎える」だろうという。実際、地球の気候は激しく変動することがあり、「数十年のうちに氷河期から脱出」もしくは突入したことですらあるという。

なぜこのような事態に立ち至ったのか。ライトは世界各地で発展を遂げた文明がことごとくはまった「前進のみの一方通行という『進歩の罨』」を挙げる。進歩とは例外なしに良いことであり、「物質的な進歩につれてモラルも高まる」と人間は考えがちである。だがそれが行きすぎると人間は破滅への道を辿る結果になる。

また経済効率第一主義は世界中で大きな経済格差を生み、社会不安や犯罪率の増加、そしてテロリズムを育む原因となっている。ライトを再び引用すれば「1950-1970年代後半まで先進国に物乞いやホームレスはほとんどいなかった」のだが、「規制緩和の現実的結末は社会的ダーウィニズムの復活」であった。

ではどうしたらよいのか。「進歩の罫」から抜けだし、消費主義から抜け出すにはどうすべきか。人間を、「私」を出来る限り正確に理解するにはどうしたらよいのか。その答えの一つが多元主義的なものの見方であることは言を俟たない。筆者の研究する欧米の現代作家の中にも、多元主義的な価値観に基づいて小説世界を構築している人たちが幾人もいる。本論文で取り上げるカナダの作家 Anne Michaels もその一人である。

『うたかたの調べ』は日本でも2000年に早川書房から『儂い光』という題で出版された。世界各国語に翻訳されて出版され、高い評価を得ている。いくつもの賞も受けている。実際の戦争はこの小説中ではあまり描写されることはない。冒頭に描かれた、主人公のヤーコブの家にドイツ兵が乱入して父と母を殺す場面が音だけで綴られ、その惨状を目撃するシーンを唯一の例外として、あとは殆どが伝聞のかたちで語られる。言い方を換えれば、この小説は喪失の悲しみを描くことによって戦争の何たるかを描いているのである。さらに描かれる喪失は、亡くなった父母の喪失である以上に、ヤーコブを助け、実の子のようにいつくしんでくれたアトスの死である。彼の死がヤーコブのうちに引き起こす思いをたっぷりと描き出すことによって、大切な人の死の悲しみが描き出されている。また直接死体を見ることのなかった姉のことも頻繁にヤーコブの意識を訪れ続ける。姉がどこでどのように死んだのか。それは解決不可能な謎となってヤーコブにとりつくのである。このようにして、虐殺されたわけではないアトスの死の悲しみに、またおそらく殺されたのであろうが、死体を見ていない姉の死への納得のいかない気持ちと哀しみにさいなまれるヤーコブの姿に接して、読者は次のように推測することになる。音を聞いただけとはいえ、殺戮の現場に居合わせて死体も見てしまった両親の死へのヤーコブの心の痛みは、さらに深いことであろう、と。この小説の中では強制収容所で「右に行くか、左に行くか」が生死を分けた実例が語られている。また作中のアトスの言うように「運命を左右するのはえてしてささいなことで、人間が支配できるのは実は目に見える大きなこと」(22) なのも事実である¹。

2. ヤーコブの再生

この世には戦争の犠牲となった人々による沢山の文書がある。今も残っている日記や手紙のみならず、忘れられたり、埋められたままになったり、また語られることも書かれることもなかったおびただしい数の日記や覚書がある。それらを指すのに本書では「物語」の語が使われている。『うたかたの調べ』はそうしたもののひとつ、つまりいわゆる「歴史」ではなく、一般の人々の側から見た戦争の歴史なのである。

ポーランドにおける、ナチスのユダヤ人迫害を扱ったこの小説は、冒頭から死のイメージにみちている。短い前書きの中で、死んだ人々の手になる文書のことがまず語られる。さらに第一部の主人公にして語り手である詩人ヤーコブ・ピアがすでにこの世の人ではないことも、読者は知らされる。続く第一部はヤーコブの回想録、第二部はその回想録の編集者であるベン語りからなる。

第一部第一章のタイトル「水没した街」は、ポーランドのビスクーピンを指す。ビスクーピンは、紀元前1300年から紀元前400年にかけて栄えたラウジッツ文化を代表する文明都市である。それは、釘を使わない巧妙な木造りの家々の立ち並ぶ、美しい街だった。一旦湖のそこに沈んだこの街は、20世紀前半に発掘された。奇跡的に原型をとどめていたのである。まるであつらえたような話だが、ビスクーピンは、東欧の歴史をひもとけばたちどころに出てくる実在の地名である（伊藤 620）。また、復元されたビスクーピンの美しい町並みをインターネット上で見ることも可能である。ヤーコブの回想は、現実に歴史の中に存在した、このビスクーピンの発掘現場から始まる。ドイツ兵から逃げ回っていたヤーコブ少年は、発掘に来ていたアトスにそこで救われる。

次に、時間的には少しさかのぼる。7歳のヤーコブは、お気に入りの場所・戸棚の中に隠れて遊んでいた。何も見えない少年の耳に様々な音が響く。ドアが乱暴に開けられる音。父と母の叫び声。大好きな姉ベラの声は、なぜかしない。つくろいものをしていた母がお皿にのせていたボタンが床に

転げ落ち、ころころと輪を描く音。その音は、彼に取り憑いて離れない悪夢の一部となる。ボタンという至って日常的なはずのものでさえ、人体解剖を思わせる「小さな白い歯」という言葉で形容される。そして火の匂い。見えないもどかしさ。父母の死のシーンをヤーコブは目撃していない。音でしか知らない。そのことが却って虐殺のむごさを、それがいかに腑に落ちない、納得しがたいことであるかを痛切に伝えている。しかも姉のベラは行方不明になってしまう。

戸棚から飛び出してきたヤーコブの見た母の顔はもはや母の顔ではなく、父の肉体も崩れ落ちる際のショックで歪み、肉の塊に過ぎなくなっている。ヤーコブは逃げ出す前にそばまで行って父母に触れたかった。それを阻んだのは流れ落ちる夥しい血であった。

昼は姿を隠して眠り、夜は歩き回ってわずかな木の実を食べて、ヤーコブは生きのびた。そして沼の泥の中に隠れ、全身泥だらけで耳にはピートが詰まったまま、アトスの前に現れる。「人生最悪の恥である飢え」に耐えかねたのだ。発掘作業をしていたアトスは、ビスクーピンの亡霊（ボグ・ボーイ）が現れたのかと思い、驚く。ヤーコブは必死でアトスに呼びかけた。彼が呼びかけに使った語、ヤーコブが各国語で知っている唯一の語は、皮肉なことに「ダーティー・ジュー」であった。小説の最初に語られたビスクーピンにおける「ボグ・ボーイの出現」、つまりヤーコブとアトスの出会いに、12頁で物語は再び追いつく。この冒頭は見事である。

アトスは外套の下にヤーコブを隠し、ビスクーピンから遥かに隔たった彼の故郷ザキントスまで逃げて行く。そこで彼らは「空に近い島」に住む。アトスは本名をアタナシオス・ルソスといい、年は50歳。ケンブリッジに学んだ地質学者である。彼の家は17世紀から父の代に至るまで海運業を営んで来た。アトスはまるで実の子のようにヤーコブをかわいがり、ヤーコブも彼によくなつき、航海術、古生物学、詩など様々なことを教わった。ヤーコブはイディッシュとポーランド語を、そしてアトスはギリシア語と英語を話した。ヤーコブはアトスについて回り、アトスはそんなヤーコブを受け止め、安心感を与えてくれる。

夜になると身を起こしてやってくる死者たちにヤーコブは苦しめられる。わけても愛する姉の消息が分からないことに、彼は煩悶する。「ベラが消え去ったことを見てとれなかったあの瞬間」にヤーコブの意識はとらわれ続ける。自分の人生は沈黙のなかにしか貯えられないが、沈黙によって捜す方法は知らない。「だからわたしはいつもほんのわずかずれていた」とヤーコブは言う。この言葉は内田樹がレヴィナスを援用して説明する「ユダヤ人の持つアナクロニズム」を思い出させる。通常は罪が先に存在し、次に有責感（罪の意識）が生じる。ところがユダヤの人々はそれをひっくり返し、罪に先立って、乃至罪が存在しないのに有責感を持つのである。それは「私自身が私自身の善性の最終的な保証人でなければならないから」であり、「神の…裁きの予感が私を善へと導くのではなく、善への志向は私の内部に根拠を有するもの」（223）でなければならないからである。彼らは因果応報ではなく、自ら引き受けた受難によって厳しく倫理的な生き方を追求する人々であり、ヤーコブもそのひとりなのである。

その後ドイツ兵は、ビスクーピン発掘にあたった学者たちをとらえてしまう。遺跡から発見された土器、ガラスのビーズ、青銅や琥珀のブレスレットを粉々に碎き、ビスクーピンを再び砂の中に埋めてしまった。そんな大昔に、非アリア系の人々が高度の文明を発達させていたなど許しがたい、というわけである。こうしてビスクーピンという街は二度死んだのである。またヤーコブを救うことでアトスも命拾いしたのであり、後にアトスはビスクーピンのことを本に書くことになる。

3. 宇宙的想像力

アトスは地質学、考古学、古生物学、化石学などの学者である。彼はヤーコブに父のような愛を注ぐ。ヤーコブは彼から人間の歴史のみならず、地球の歴史をも学ぶ。

こうしてヤーコブはザキントスの風景と、アトスとの暮らしに少しずつ癒されていく。それでも父と母の死の場面の音は彼に取り憑き、悪夢は彼を離さない。ヤーコブは死者と共に生きている。食事をするのが遅いのはベラと

話しているからであり、ドアをあけて部屋に入るのに時間がかかるのは、あとから入るベラのためにドアを押さえているからなのである。「夕方になると、アトスが机で読書するのを私は見守った。そして母はテーブルで縫い物をし、父は新聞を読んでいたし、ベラは楽譜をじっくり眺めていた」(18-19)。そんなヤーコブをアトスはやさしくうけとめる。「君は食べるのがとてもゆっくりだね、ヤーコブ。貴族の習慣を身につけているんだね」(31)と。アトスは「内側の燃え尽きた建物のようだよ」とヤーコブを気遣い、「君が自分を傷つけるなら、私もそうしなければならないよ、ヤーコブ。私の愛は無意味だと私に証明しなければならないよ」(45)と語りかける。

ヤーコブを癒していくものの一つに地球の歴史がある。アトスのくれた新しい世界は、いわば宇宙の想像力とでもいうものをヤーコブのうちに喚起する。「堅い岩がシチューのようにふつふつと煮えたぎっているところを想像してごらん。一つの山が丸ごと燃え上がっていたり、ちょうどリングがひとかじりごとに小さくなるように、山が雨にゆっくりと侵食されていくところを」。彼は古生物学から化石学に、そして詩へと移っていった。「最初の屈光性の生物と、動物の最初の呼吸と、単性生殖をやめた最初の細胞と、最初の人間の誕生のことを考えてごらん」。しかしこの連想ゲームは「最初の武器は…」(21)というまがまがしい質問へと二人を導かずにはいない。この美しい詩のような小説では地球そのものも、大切な登場人物なのである。『自省録』がそうであるように、その気の遠くなるような歴史によってヤーコブは癒されていく。また人類の歴史をはるかに超えるその壮大な歴史は、我々に人間のはかなさと愚かさ、そしていとおしさを改めて感じさせずにはおかない。

イタリア人兵士たちは比較的大らかで、ザキントス周辺のユダヤ人地区はパトロールするに止めていた。しかしやがてドイツ兵たちが侵攻してきて、1944年6月5日、ユダヤ人たちは一斉に姿を消す。アトスたちに食料を届けてくれていたマーティノー一家も、である。一週間後にやって来たマーティノーは、あるユダヤ人女性がみんなの前でナチス親衛隊に撃ち殺されたこと彼らに告げる。同年9月、ドイツ兵がザキントスを去り、平和が訪れた。

しかしヤーコブはなおも苦しみ続ける。そして「靈魂が肉体を忘れるまでには、…殺人と普通の死の違いがなくなるには何年かかるだろう？ …音波が永遠に進んでいくとして、殺された人々の叫びは今頃どの辺にあるのか？ 多分銀河系宇宙の中だろう、永遠に賛美歌に向かって」（54）と考え続ける。彼にとって唯一現実味があるのは、肩におかれたアトスの手の感触だけで、あとはすべて夢のようであった。知り合いに招かれてトロントの大学で教えることになったアトスは、カナダに移るに先立ち、親友のコスタス・ダフネ夫妻に会いに行く。彼らもヤーコブをわが子のようにかわいがってくれ、彼は「彼らの愛というぜいたく」に存分に浸る。ヤーコブがいつもの悪夢にうなされると、三人とも飛んで来た。ベッドに腰掛けて話す三人の静かな声を心地よく聞きながら、ヤーコブは眠りに落ちていった。

「言葉には破壊し、排除し、排斥する力がある。しかし詩にあるのは取り戻す力なのだ」とアトスはコスタスに言う。これこそ、アトスとコスタスがヤーコブに教えようとしたことだった。また「ある風景を愛することを知ると、他の風景を愛することも」知るようになる。愛する風景を持たない人間とは「単なるものを映す鏡」にすぎないのである。風景を愛するとはそこに暮らす人々を、また人々の暮らしを愛することである。精神的なよりどころ、精神的な故郷をもつことである。このようなことを、ヤーコブは二人の会話から学んでいく。

トロントに移ってからも、ヤーコブは相変わらず悪夢に悩まされた。アトスは「お前が眠っている間に記憶を盗み取ってやれるものならばよいのだが」とヤーコブを気遣う。次第に英語を覚えたヤーコブは、英語で子供時代のことを書き出す。すると、まだ記憶のしみついていない言語である英語が、自分を守ってくれることに気づいた。

ナチスとビスクーピンについてヤーコブは次のように解説している。

1939年、ビスクーピンはすでに有名で、「ポーランドのボンペイ」と呼ばれていた。しかしそれは非ドイツ系の文明が過去に発達していた証拠だったので、ヒムラーはその抹消を命じた。未来を所有するだけでは充分

ではなかったのだ。ヒムラーの「遺跡庁」の任務は歴史を征服することだった。領土拡大政策によって、彼らは時間だけでなく空間をもののみこんだのだ。(104)

この頃アトスの書き始めた『偽証』という本は、上述のこと、すなわちナチスがいかに考古学を悪用し、過去を捏造したかを書いた本だった。この本を書くことこそ自分の良心の証しと考え、アトスは心身を擦り減らしながら書き続けた。

やがてヤーコブは大学に入り、モーリス・サルマンと知り合い、二人は生涯続く親友となる。その頃、アトスが亡くなった。あまりにもひっそりと死んだために、彼はまるで眠っているように見えた。その死の衝撃を、ヤーコブは、「何度も力いっぱい抱き締めたがアトスは戻らなかった。命の消えた細胞の一つ一つに手を差し伸べて暖めるのは不可能なことだ」(114)と書いている。アトスは文字通りヤーコブの命を救い、そして深い愛を注いで彼に新たな命を与えてくれた。そのかけがえのない人の死の喪失感に、ヤーコブはさいなまれる。子供の時のアトス。15、25、そして30歳のアトス。彼の中に残っていたそのすべてがアトスの死とともに永久に失われてしまったのである。穏やかな死ですらこれほど悲しいことなのだ。まして殺された場合の衝撃は、納得のし難さは、想像を絶するものであろうと、読者は改めて認識させられる。

アトスが死んでしまった悲しさを詳細に書き綴り、読者にヤーコブの悲しみを伝えることには、上述のような意味がある。このように、アトスの死に寄せるヤーコブの悲しみは、この小説全体のテーマに貢献しているのである。虐殺ではない自然な人の死を、時間をかけて受け入れ納得していくのは、人間にとって当たり前のはずのことである。かけがえのない人の死を悼み、悲しむ自分と向き合い、やがてその死を受け入れて行く「モーニング・ワーク」(喪の作業)は、このとき初めてヤーコブにとって可能となった。

アトスの机の中には、若くして死んだ妻ヘレナと彼との往復書簡があった。それとともにたくさんのコピーや切り抜きが見つかり、アトスがペラを

探してくれていたことが分かる。「アトスは考えをまとめるために限りなく問いを發し、『なぜ』という問いは最後に残しておいた。私はその『なぜ』から始めた。他のすべての問いの答えから必然的に答えが分かってくるだろうとアトスが願ったその問い。それで私は最初からつまずき、一步も進めなかった」(118)とヤーコブは回想する。

4. ベラ（娘と息子）へのメッセージ

次の「燐光」という章では、ヤーコブと最初の妻アレックスとの出会いが語られる。しかし二人の間が長く続きそうもないことは、章の出だしですでに明らかである。冒頭ではまず現在形で、ベラの夢を見たことが語られる。そして夢から覚めたヤーコブは「見知らぬ女の隣にいる私を、どうやってベラが見つけられるだろうか？」(126)と思うのである。ミュージック・ライブラリーで出会った二人はたちまち恋に落ち、結婚した。しかし結婚して2年たつと、再び悪夢が戻って来た。ヤーコブは「私の人生は沈黙によってしか語れない」と思っている。そしてアレックスはヤーコブを救おうとして、過去を忘れさせようとする。しかしヤーコブは「記憶が私からすり抜けていくたびに、私自身が一緒に失われていく」(144)と感じていたのだった。「あなたは恩知らずだ」と言ってアレックスは去って行った。このあとに、イタリックスで、ヤーコブの心象風景を表す短い物語が綴られている。小さな男の子が、部屋から一步も出ないで待っているように両親に言い付けられ、独りぼっちで待っている。そしてしまいには食物がなくなるが、それでも両親は戻ってこない。空腹のあまり、男の子の意識は次第に薄れて行く、という話である。

続く「主のない大地」という章では父祖のことを「彼ら」ではなく「わたしたち」で語るユダヤ人の伝統が言及される。それによって時間感覚は崩壊し、「わたしたち」は永遠にエジプトからの旅をし続けていることになる。言い換えれば不道德な行為はいくら言い訳をしても消すことができないのである。「これは道徳を教えるのにいい方法だ」とヤーコブは言う。ユダヤの伝統が、同じ一人称複数を使ったヒトラーの演説と、目指すところが正反対

であるのは興味深いことである。ヒトラーの演説は、人々の一体感を高めつつ個々人の道徳的判断力を麻痺させ、支配者側の意向を巧妙に押しつけたのであった。

またこの章では血のつながらない大人の女性と女の子の物語が語られる。二人の心が通い合い、見知らぬ人に「この娘はあなたにそっくりだ」と言われる。この、血のつながりのない大人と子供の間、本物の親子のような心の通い合いは、アトスとヤーコブの関係の変奏曲となっている。大人が血のつながらない子供をわが子のように慈しむことは、マイケルズのいう、人を救う善い行いのひとつでもある。「何物も、非道徳的な行為を消し去ることはできない」(160)。しかし悪が取り消せないのなら、善も取り消せない。それがたとえどんなにささやかな善行に過ぎないにしても、である(162)。

ナチスはユダヤ人をモノ扱いして、そのモノにすぎないユダヤ人を排斥しようとしたのであり、それは人種差別よりもひどいことだ、とヤーコブは言う。また死刑執行人は「ユダヤ人は人間ではない」と教えられている。しかしいざユダヤ人を殺そうとするときになって、突如その兵士はユダヤ人が人間であることに気づく。と同時に自分が生き延びるためには自分の仕事をやり続けるしかないことも処刑者には分かっている。それで彼は「ユダヤ人は人間ではない」ということが嘘であるという事実には気づかないふりをして仕事を続ける決心をする。そして、「死だけが人間をモノに変えられるのだ」とその兵士が気づいたとたん、彼の問題は解決する。ユダヤ人を殺して、本当のモノと化してしまえばいいのだと。かくして怒りと残酷さはいや増す。処刑する相手の人間らしさを破壊しようとする欲求が大変強いものだから、彼の残酷さはとどまるところを知らない(166)。これが虐殺のメカニズムである。

私たちは最大の侮辱を受けた、まさにその場所で魂をさがす。新しいアダムが立ち上がる、再出発するのはそこからでなければならない [中略] 私はベラのそばにいたい。ガス室を開けると死体は常に一つの壁の近くに折り重なっていた。最後まで空気を求めて。中には出産しかけて死ん

だ女もあった。名前すら与えられずに生まれ、そして死んだ君よ。許したまえ、事実の残酷さよりも思想を選んでしまう冒涇を。それ [ガス室] は我々の人間への信頼が、神への信仰への変化を強いられたその瞬間なのだ。(167)

このように、アトスの故郷であるイドラで、ベラや両親のこと、そしてなくなった多くのユダヤ人のことをヤーコブは考え続けた。そして彼は最後になって、ベラが「死んで私のところへ来て」と囁いていたのではなく、悪夢から覚め、立ち直って世の中に戻るよう促していたことに気づく(170)。

新たな気持ちを胸にカナダに戻ったヤーコブは、ミケーラに出会う。年こそ25も下だったが、ミケーラはヤーコブの悲しみを理解し、ベラのために涙を流す。こうしてヤーコブは生まれて初めて、喪失の悲しみを分かってもらえる喜びを味わう。やがて二人は結婚する。そしてヤーコブは毎晩「幸福が目覚める」(194)のであった。

沈黙によってしか語れない思いを受けとめてくれたのは、過去を忘れさせようとしたアレックスではなく、ヤーコブの悲しみを理解し、ベラのために涙を流してくれたミケーラだった。アトス亡き後の世界で、そのミケーラによって初めてヤーコブは心底から癒されていき、幸福を味わう。そして生きる気力を持てるようになり、子供が欲しいと思うのである。

かくして第一部の最後はまだ見ぬ息子 (Bela) と娘 (Bella) への呼びかけで終わっている。「君たちが愛に気づかないなどということが絶対におこらないように」(195)とヤーコブは記す。ほんのわずかの善行でも大きな意味がある。それに悪と違って「善行は繰り返しのみのみ、その存在を証明する」(165)のである。諦めることなく、たとえどんなささいな事でも、私たちは善行を積み重ね、繰り返していくほかはないということである。

5. 癒しとしての物語

第二部の主人公ベンはヤーコブより少し下の世代である。ヤーコブがアトスの精神的息子であるように、ベンもヤーコブの精神的息子である。従って

アトス——ヤコブ——ベンと三代にわたり、精神的親子関係が続いていることになる。戦争中、ベンの両親は強制収容所に入れられていた。そのとき二人の子どもも別れ別れになったものと思われる。そしてベンが生まれたとき、すでに兄と姉はなくなっていた。彼の両親は「三番目の子は名付けなければ死の天使が通り過ぎて行ってくれるのではないか」（255）と考え「ベン」（ヘブライ語で「息子」の意）という名にしたのであった。ベンの妻ネイオミはとても包容力のある、同情心に充ちた人だった。彼ら二人はヤコブがまだ生きていた頃、彼に会いに行った。彼はネイオミの話に耳を傾け、「花を持ってしょっちゅうお墓参りにいくなんて、馬鹿げているとお思いでしょう」というネイオミに、「いやそんなことはない。死んだ人にとときどき美しいものを持って行ってあげるのはとてもいいことです」（208）と言う。彼女の顔に感謝の表情が浮かぶのを見て、ベンの心は痛む。なぜなら彼はネイオミが彼の両親の墓参りをすることにいらだち、どこかおかしいのではないか、自分の両親の死ものりこえられずにいるし、18のときからずっと喪に服す必要を感じ続けているなんて、と責めていたからだ。「あなたは耳を傾けてくれた。告解を聞く神父のようにではなく、自分の罪の贖いについて聞く罪人のように。人の気持ちをはっきりさせ、自分は清らかだと感じさせるという点で、あなたは何という素晴らしい才能を持っていたことか。まるで語ることで本当に人が癒されるかのように」（208）とベンはヤコブのことを回想する。

ベンは父の死後、封筒に入った一枚の写真を持ち帰った。幼くしてなくなった姉と兄が両親と写っている写真である。それを見たネイオミは「とても悲しい、恐ろしいことね」と言う。ベンの母は、ベンも知らない秘密をネイオミにだけは打ち明けていたのだった。一方ネイオミはベンがこのことを知らないという事実を知らなかった。ベンは大きなショックを受ける。そして「モーリス [ヤコブの親友] がヤコブの日記を探しているから、体調の優れない彼の代わりにイドラに行って捜してあげたら」というネイオミの言葉に従うかのように、ひとりギリシアへ旅立つ。まっすぐヤコブの家へ向かい、彼の日記をさがし始める。家の中で彼はしばしばヤコブとミケーラ

の気配を感じたり、人影がさっと通り過ぎるのを見たように感じ、彼らはまだ生きていると思うのだった。

町でペトラというアメリカ人女性に出会ったベンは、彼女に惹かれ、二人は一緒に暮らすようになる。しかしそれは長くは続かなかった。ある朝目覚めてみると、ペトラがヤコブの本棚を勝手にいじくり回している。驚いたベンが跳び起きて彼女の手首をつかむとペトラはびっくりし、怒って出て行ってしまふ。ペトラは思ったよりひどく家の中を荒らしていた。しかしそのお陰でベンが探していたノートが見つかる。ノートは二冊で、一冊は1992年6月、もう一冊は1992年11月と日付が記してある。ベンはノートを手当たり次第に読み始めた。その内容が、我々の読んで来た本書の第一部ということになる。

日誌に読みふけた後、ベンは家の中で見覚えのあるスカーフを見つける。それはネイオミのものではなかったが、このことをきっかけに彼の思いは再び妻へと向かう。自分は彼女の外見を詳細に語るからこそ出来ないものの、彼女の考えていることや、彼女が何を覚えているかはよく知っている、と考える。そして妻のもとへ帰ることにし、ベンは機上の人となる。ネイオミが今何をしているだろうか、と思い巡らしたあと、ベンは自分が6歳のとき目にした光景を思い出す。戦争によって心に刻まれた深い傷のために過食症に苦しむ父は、一旦たががはずれると涙を流しながら際限なく食べ続けるのであった。ある日父は泣きながらものを食べていた。すぐ後ろに母が立ち、父は母に頭をもたせかけ、母は父の頭をなでていたのである。その光景の意味するところは「二人はお互いに相手からエネルギーをもらっている」(294)ということだったと、現在のベンには分かるのだった。

第二部の最後は「自分が必要とするものを人に与えるべきなのだということが私には分かる」(294)という言葉で終わっている。これでベンは名実ともにヤコブの精神的息子となったのである。

批評家の中には、正しくも「マイクルズの語る物語はまったく目新しいというわけではない。同じようなテーマについての話しは何千年にもわたって、何千という人々によって、何千回も語られてきた。設定はありふれたも

のだし、主要な人物もどこにでもいそうな人たちだ。この物語を他のすべての物語と異なるものとしているのは、マイクルズの語り口である」(Dunn) という人がいる。その語り口は、いかにも詩人として出発したこの作家らしく、散文詩さながらである。磨き抜かれた言葉を駆使した簡潔な言い回しは、ときに文法にあった文章の域を逸脱し、難解なこともないではない。しかしその難解さは、韜晦や術学趣味とはおよそ無関係である。

政治の用語で語っている限り、戦争の中で死んでいった一人一人の痛みや悩みは見えてこない。大所高所に立って歴史を論ずるとき、私たちは無意識に神の位置に自分を置いている。ホロコーストで六百万のユダヤ人が死んだ。そう簡単に言い切ってしまうとき、私たちに何が見え、何が見えていないだろうか。その六百万分の一が例えばアンネ・フランクである。そしてアン・マイクルズが生み出したこの美しくも恐ろしい小説は、アンネの日記と同じく、その見えないものを見えるようにする試みである。アンネの日記については、次のような解説がある。

二十世紀は大量殺害の時代だった。二度の世界大戦、ホロコースト、そして原爆。ときに百万単位で人間が殺された。人々は、死が、数で数えられることに慣れてしまった。アンネの日記は、この「慣れ」に警鐘を鳴らした。

無名のまま死んでいった人たちの一人一人が、それぞれ悩みや愛、希望を持ったかけがえのない人間であったこと、すばらしい才能も数多くあったことを、日記は示した。(『朝日新聞』3)

『うたかたの調べ』はフィクションではあるが、読むものにとってちょうどアンネの日記に似た働きをしている。その散文詩のような文体は、一語一語が重い意味をはらみ、この小説を単なるストーリーとして読み流すことを、読者に許さない。その禁欲的なまでの作家の姿勢は、「反戦」を標榜しつつ、勇ましく戦う兵士を描くことによって、むしろ戦争を美化しかねないような作家の姿勢とは、正反対であると言えよう。

『うたかたの調べ』はマイクルズが十年の歳月をかけ、沢山の資料を読んで書いた作品である。小説には異例のことだが、巻末には、この小説を執筆するにあたってマイクルズが参照した、沢山の参考文献が記されている。また作家自身、自分が有名になることより、この作品がより沢山の人々に読まれることを望んでいる、と明言している。

この小説の第二部に竜巻のことが書かれている。竜巻は、ちょうど戦争のように、一瞬にして人間の暮らしをめちゃくちゃにする。しかしまた一方では、その同じ竜巻が、一パックの卵を巻き上げて、一つも壊さずまたそっと地上におろすことすらある。同様に、人間のささやかな善意やちょっとした親切な行いで人が救われることも現実でありうる。「認識においてはペシリスト、行動においてはオプティミストたれ」というアルチュセールの言葉を我々は肝に銘ずるべきであろう。

6. 新しい時代へ

第一部の最後でヤーコブは子供が欲しいと言っている。自分が生きているという実感さえ持てないほど苦しみ、悪夢に悩まされ、死んだ人たちと生きてきたヤーコブが、子供を欲しがったのである。それは、自分の子孫にこの世界を与えてもいいということである。この世を、自分の血を分けたものが生きて行くに値するところとして認めたということである。子孫を通じてこの世に永遠の生を得たいと願うことである。マイクルズは人間存在の悪、歴史の中の人間の悪行や愚行、また人間は人間の上にあらゆる残酷な行為をなすし、実際になしてきたという事実を冷静に客観的に認識したうえでなお、この世は基本的に美しいところ、いいところである、人生は生きるに価する、と私たち読者に語りかけているのである。

「私たちはささやかな愛の行為がもつ力を忘れてしている。それがどんなに強力かを忘れてしている。歴史や、経済の動きなどといった大きな力の前で、私たちはしばしば絶望的な気持ちになる。しかし実際に、個々人のささやかな行為が、信じられないくらい大きな力を持ちうるのだ」(‘real:interviews--Anne Michaels’)とマイクルズはインタビューに答えて言っている。また

書くこととホロコーストとがどうかかわりを持つのかについては、マイケルズは次のように述べている。「ナチスのために死んでいった人々にとって、書くことは、自分の死んだ後にも自分の何かが残るのだという、何物にも代えがたい思いを与えた。死ぬ者にとって書くことは慰めのもととなった。私たちは彼らのために、彼らの残した痕跡を確実に保存するという義務、また彼らの物語が語り継がれるようにするという義務がある」(‘Orange Prize for Fiction’)と。

死んでいった人々の物語を語り継ぐこと。それによって死んでいった人々の言葉は、滅び行く肉体を超えた力を持つことになる。それは生け贄とされた人の死体が、彼を犠牲とした支配者のそれより遥かにあとまで残ることがある(49)のに似ている。犠牲は犠牲とされることで、物質の地平を超えるものとして聖別されるのである。(このことは私たちに十字架上のキリストと、パッション(受苦)という言葉の成立のゆえんを思い出させる。)そしてこのように語り続けることこそが、「信じられないくらい大きな力」を持ちうる、「人々のささやかな愛の行為」の一つに外ならないのであり、マイケルズがこの小説を書いたこともそのような行為の一つと言えよう。このことは、私たちに、ドイツ系ユダヤ人の哲学者、ヴァルター・ベンヤミンの歴史認識を思い出させる。

ベンヤミンによれば「歴史の中の死者の叫び——それも勝者ではなく敗者の——を聴く能力を持つこと。可能性を出さずに死んだもの／出来事／事物たちへの哀悼の作業、喪に服することこそ、まずは歴史認識の努め」(今村 124)であり、このように死者の叫びに耳を傾け、敗者への喪に服することで、人間の上にもささやかな希望のひかりがさす。なぜならそれらこそは、暴力なき世界、支配なき世界実現への第一歩だからである。(今村 128-129)

また一見この小説は、前書きと第一部だけでもよさそうに思える。第一部のインパクトの強さに比べ、第二部の印象は薄い。この点について、つまり本書が何故二部構成なのかについて、マイケルズはこう説明している。

最後まででは経験しなかった、あるいは実際に経験しなかった出来事に、ヤーコブとベンが二人共深く影響されるということが、大切なのです。…第二部はぜひとも必要なのです。ある意味では、ベンはやーコブの後継者なのです。だからヤーコブには子供はいませんが、後継者が一人いることになります。そこに希望があります。家族をなくしてしまった多くの人々の持てる希望が。自分を覚えていてくれる人が誰ひとりいない人の持てる希望が。

私は読者を暗闇の中に置き去りにしたくなかったのです。第二部を書かずにこの本を書くことはありえなかったと思います。

(WordsWorth Books)

確かに第一部で終わりであれば、最後にヤーコブが抱いた希望が提示されるだけで終わってしまう。その希望は宙ぶらりんのままであり、その後具体的にどう未来につながっていくのか、どう受けつがれていくのかは分からない。読者は、暗闇とは言わないまでも、かすかに光がさすだけの薄暮の中に置き去りにされることになる。第二部があることで、その希望の行方がはっきりする。血のつながった子供にこそ恵まれなかったが、ヤーコブはベンという精神的息子と、ネイオミという精神的娘をさずかったのである。ヤーコブが何より子供たちに伝えたかったことは「愛に鈍感であってはならない」(195)ということであり、ベンの最後の言葉は「自分の必要とするものを人に与えるべきなのだ」(294)というものである。

人間は決して善きものではない。そのことは、歴史の中で繰り返され、今現在も地上で行われている様々な残虐行為を見れば明らかである。そのうえ悪は伝染性であり、ナチスだけが悪なのではない。カート・ヴォネガットは、ナチスの二重スパイを描いた小説『母なる夜』の中で次のように言っている。「悪とは何か。それは誰の心にもある、際限なく人を憎悪しようとする、神を味方につけて人を憎悪しようとする欲望のことだ」(181)。しかも悪の存在を証明するには一回の残虐行為でこと足りるが、善は繰り返しのよってのみその存在が証明できる。私たちは社会の巨大な力の前で、ともし

れば勇気を失いそうになる。しかし、一見ささいな善行が、とるにたらないものとしか思えない善行が、実は大きな力を発揮しうるのである。詩の力による秩序の回復を目指すこと、また死者たちの物語を語り継ぐこと——それらが私たち後の世を生きるものに課せられたしごとである。

この世は涙の谷であり、悲劇に満ちている。救いは見いだしがたい。人間は決して善いものではないし、悪は伝染性だ。悪の存在証明は一回の悪行で足りるのに、善行は積み重ねるしかない。それでもこの世は美しいし、生きるに価するものである。「人は常に愛に気づくべき」(195) であるし、「自分が必要とするものを、人に与えるべき」(294) なのである。これがヤーコプとベンと、そしてアン・マイクルズの、ベラ（娘と息子たち）へのメッセージである。

テキストは Anne Michaels, *Fugitive Pieces* (London: Bloomsbury, 1998) を使用し、引用頁は文中に () で示した。訳は『儂い光』(黒原行雄訳 早川書房 2000年) を参照した。

注

(1) この小論は、『イギリス女性作家の半世紀第5巻 90年代・女が拓く』(勁草書房, 2000年, 絶版) 所収の拙論「子供たちへのメッセージ」に加筆・修正したものである。

引証資料

Vonnegut, Kurt. *Mother Night*. New York: Dell Publishing Co., Inc. 1961; 1983.

『朝日新聞』1998年5月31日

伊東孝之他『東欧を知る事典』平凡社, 1993年

今村仁司『ベンヤミンの問い』講談社 1995年

内田樹『私家版・ユダヤ文化論』文藝春秋社 2006年

河合隼雄『日本人の心のゆくえ』岩波書店 1998年

多田富雄『免疫の意味論』青土社 1993年

宮田光雄『ナチ・ドイツと言語』岩波書店 2002年

ライト, ロナルド『文明の暴走』NHK 出版局

レーヴィ, プリーモ『アウシュビッツは終わらない』朝日新聞社 1980年

Mary Dunn, 'A Final Peace' (<http://www.wordsworth.com/www/present/fugitive/27114223118622,99/3/26>)

'Orange Prize for Fiction,' Chair of Judges, Lisa Jardine on Michaels
(http://www.orange_prize.com/previous/1997_AM.html,99/3/26.)

'real:interviews--Anne Michaels' (<http://www3.bc.sympatico.ca/coho/michaels.html,99/3/26>.)

WordsWorth Books: Interview with Anne Michaels (<http://www.wordsworth.com/www/present/michaels/27114223118622,99/3/26>.)